

第20回軽金属学会功労賞

軽金属学会功労賞は、永年にわたり軽金属学の発展ならびに当会の活動に顕著な貢献をした者に贈る。



塩田 正彦 君
(日本軽金属株式会社
技術顧問,
日本大学 上席研究員)

塩田 正彦 君は、1980年に日産自動車株式会社に入社し、総合研究所においてアルミニウム軸受合金、急冷粉末合金、耐摩耗アルミニウム合金、チタン合金の研究および部品適用技術開発を行ってきた。その成果は軽金属学会のシンポジウム、講演大会、論文等で報告されている。2001年に日本軽金属株式会社に入社後は、くるまの電動化に着目し、高熱伝導合金、自動車用アルミニウム電線を開発し、いずれも車載に結び付けた。このように、自動車部品の軽量化という重要な課題に対し、多くの開発実績を有し、軽金属分野において学術的のみならず工業的にも大きく貢献している。

軽金属学会においては、企画委員会委員、広報委員会委員、秋期大会実行委員会委員、関東支部運営委員会委員を務め、高信頼性ダイカスト・鋳物鋳造技術研究部会委員として部会運営も行っている。また、軽金属学会シンポジウムでは講師も務め、学会に多大な貢献を果たしている。特に、関東支部では、若手研究者育成研修会での講演、工場見学会の企画等を積極的に行い、自動車軽量化技術の発展ならびに軽金属分野の人材育成に大きく貢献している。

以上のように、同君の軽金属に関する功労は極めて顕著であり、ここに軽金属学会功労賞を授与する。



土田 孝之 君
(日本軽金属ホールディングス株式会社
常勤監査役)

土田 孝之 君は、1988年日本軽金属株式会社に入社後、長年にわたりアルミニウム材料およびその製造技術に関する研究開発に従事してきた。その活動から、自動車用サスペンション部材や自動車ボディ用アルミニウム合金板材、輸送機器用高強度アルミニウム押出型材など数多くの商品を生み出し、アルミニウムの用途拡大に貢献してきた。また、JRCM主導のアルミニウム系スーパーメタルやNEDO主導の水素用アルミニウム材料の基礎研究、JST委託開発によるアルミニウム合金を用いた疲労耐久性に優れた道路橋用の床材の開発など、さまざまな産学官共同プロジェクトにも参画し、アルミニウムの用途拡大に資する研究開発を支えてきた。これら開発で得られた成果は、特許や学術論文などで公開し、本分野の発展に大きく寄与している。

軽金属学会においては、理事や編集委員会副委員長などを務めるとともに、ICAA 12では実行委員会副委員長として、AFLM 2012は国際交流委員会委員として、ALMA Forum 2014は国際交流委員会委員長として開催に携わり、軽金属学会の国際化にも大きく貢献した。さらに、研究委員会委員長として研究部会の活性化に取り組み、若手研究者参画の機会を広げる努力をするなど成果を上げてきた。

以上のように、候補者の軽金属に関する功労は極めて顕著であり、ここに軽金属学会功労賞を授与する。



村松 俊樹 君
(元 株式会社UACJ
技術開発研究所
研究企画業務部
研究企画室 上席主幹)

村松 俊樹 君は、1979年にスカイアルミニウム株式会社に入社後、古河スカイ、UACJと合併により名前が変わっても一貫してアルミニウム製品の研究開発に従事してきた。その中で、これら製品の開発のための基礎的現象解明としてアルミニウムの軟化挙動も調査し、その結果1987年には軽金属論文賞を受賞している。これに関連してアルミニウム中の添加元素の固溶量の測定方法を提案し、この方法は現在も行われている。軽金属学会活動として、同君は編集委員会編集幹事や企画委員会委員、総務委員会委員等を務め、会誌の編集や校正、シンポジウムの企画や講演会の世話人等を行ってきた。また最近では理事並びに総務委員会委員長を4年間務め、軽金属学会の運営および人材育成や維持会員拡大活動や広報活動に貢献した。さらに、軽金属学会の分担としての日本工学会理事を2年務め、双方の学会運営向上に貢献した。加えて東海支部の支部長を3年務め、第132回春期大会で実行委員会副委員長を務めるなど支部活動にも尽力した。その間、企業奨励賞の東海支部からの3年連続受賞企業を推薦するなどの多大な成果を出している。

以上のように同君の軽金属に関する功労は極めて顕著であり、ここに軽金属学会功労賞を授与する。